

動詞非終止形の体系づけ

まつもと ひろたけ

【要 旨】

日本語動詞の多様な非終止形は、連体形、連用形以下、区分のしかたが、いろいろ提案されている。それをおおきく、連体形、連用形、接続形のようにまとめた。準体形は連体形グループに、条件形、譲歩形、シイシイ、シナガラなどの副動詞は、シ、シテ、シタリなど狭義の連用形とともに広義の連用形グループにまとめ、接続形は連体・連用両形にくらべててもちの Kategorii が終止形的だが、「かかり」性をおもくみて、ここでとりあげた。

【キーワード】

動詞、非終止形、連体形、連用形、接続形

□はじめに

日本語形態論のなかで、動詞の文法的な側面をどのように記述するかをめぐって、小論の筆者は「文法記述のために一動詞のばあい」(『別府大学紀要』55)で、活用体系に関しては、基本的な動詞語形の肯定・否定系列(動詞ヨムでいえばヨムーヨマナイの両系列)の終止形をとりあげた。しかし、日本語の動詞は、終止形以外が連用形、連体形などと多様に分化して、動詞形態論を構成している点に特色がある。筆者自身も方言の動詞非終止形の記述にあたって、確定したパラダイムをさしだすことができず、報告ごとにまちまちのものになっていた。以下は筆者の現時点でのとらえかただが、これまでのまちまちのとらえかたに、もうひとつ「まちまち」をつけくわえただけのことになるかもしれない。

□連体形

琉球方言や八丈方言などをのぞいては、現代日本語の終止形は連体形を出発点としている。以前の終止形と連体形は、ウクーウクルとか、シヌーシヌルという、表現面での分離が容易なもののある点が、現代日本語とことなっている。

現代日本語で連体形を終止形から分離するには、他の基準、連体形に属する語形の対立のしかた、つまり連体形の活用体系が終止形とことなることに依拠しなくてはならない。そして、終止形、連体形などの区別では活用体系が問題になっている以上、この基準がもっとも重要なものである。

終止形がテンス、ムードのカテゴリーにそって活用するのに対して、連体形はテンス対立しかしめさない。こうして、連体形にははたらきかけ法はもちろなし、推量法のかたちもみられない。以下の表では非過去形、過去形などの表示は省略してしめす。

みとめ連体形

ヨム (ひと)	ヨンダ (本)
---------	---------

うちけし連体形

ヨマナイ (本)	ヨマナカタ (ひと)
----------	------------

奄美諸方言の連体形はうたことばを中心にあられるふるいかたちと、はなしことばのかたちとふたとおりあることがある。

奄美大島北部方言

みとめ

うたことば	ユミユル	ユダル	ユミユタル
はなしことば	ユミユン	ユダン	ユミユタン

うちけし

ユマヌ	ユマンタル
ユマン	ユマンタン

ただし、ソンナ コトノ アロウ ハズガ ナイ、のようなふるい推量形が一部の形式名詞にかかるさいにみられたり（奄美大島方言でもうたことばにみられることがある）、生硬な翻訳調に カレガ ノムデ アロウ サケのようなかきことばがでてくるが、連体形においては体系としての断定—推量のムード対立をになうことはできていない。

□連体形の周辺のかたち

テンス対立しかしめさない語形は、連体形とおなじ対立をしめすものとして、連体形とかかわりのふかいかたちである。

○準体形（動名詞）

みとめ

ヨムノ	ヨンダノ
-----	------

うちけし

ヨマナイノ	ヨマナカッタノ
-------	---------

準体形はつくりの点でも連体形を出発点とする。古代日本語や八丈方言、奄美大島北部方言などでは連体形と同形の準体形があらわれる。

さらに、準体形をもとにしたヨムノデーヨンダノデ、ヨムノニーヨンダノニのようなかたちも連体形とおなじ対立一分布をしめすが、これは別項、接続形のところでふれる。

準体形として名詞的にはたらくかたちには、別に不定句、不定節をつくる スルカ、シナイカのかたちがある。ナニオ チューモンスルカデ ナカナカ ハナシガ マトマリマセン、とか、ダレガ コナカッタカガ ワカレバ イーンダケド、など。

このスルカ準体形は、ていねい系列はでてこない。日本語学習者のいいあやまりに、ナニオ チューモンシマスカデ ハナシガ マトマリマセン、のようなのがきかれることがある。推量形のコレデ イーダローカオ ヨク カンガエテ ミロ、のようないかたができるとしたら、その点では終止形ににてくる。

□連用形

非終止的な語形のうちムード、テンスの対立のどちらもみせないものを連用形とする。ふつうの連用形よりはひろくなり、内容的にロシア言語学の用語で、アルタイ語学などに転用される副動詞にちかくなる。以下では連用形の下位を中止形、条件形、譲歩形という通用の用語で区分しておく。

○中止形（みとめ）

中止形は、文のなかで、主文の述語のしめすうごきとの時間的な前後、あるいは同時関係をあらわす。また、主文の述語のしめすうごきに対して、副次的なうごきをしめすようになるばあいもある。

旧連用形	ヨミ
シテ形	ヨンデ
シテカラ形	ヨンデカラ
スルマデ形	ヨムマデ
ならべたて形	ヨンダリ

旧連用形ははなしことばではそのままではつかわない。たいてい、ヨミモ（シナイ）、ヨミワ（ヨミヤー）（スル）のようなかたちであらわれる。

また、奄美大島、徳之島などの方言で、単独でつかわれることがあるが、中止形としての用法でなく、終止的な述語用法がめだつ。

シテ形の用法は、あわせ文のくみたてにくわるものから、副詞とおなじ修飾語になるものまでさまざまである。なお、奄美諸方言では過去終止形としての用法も発達してい

て、同音形式がたつ。

- ・タローガ ウタッテ ハナコガ オドッタ。(あわせ文に)
- ・タローガ ヒトリデ ウタッテ オドッタ。(ふたまた述語文に)
- ・タローガ ナイテ クヤシガッタ。(修飾語化)

ならべたて形は～シタリ ～シタリ スル、～シタリ ～シナカッタリダのような用法がめだつし、中止的な用法でも、～シタリ～ シナカッタリデのような形式、イマノ トコロ ネタリ オキタリデ 完全ニ ナオッタトハ イエマセン. とか、ネタリ オキタリノ生活、などという、動詞形式からはずれていく用法がでてきそう。また、～シタリ～シタ. のようなはしょった使用も標準語にでてくるが、方言ではどうか確認する必要がある。

うえにあげた中止形は、それをふくむ文において、どれも、じまえの主語をもつことができる。うえのタローガ ウタッテ ハナコガ オドッタ. のように。これがあとにあげる副動詞中止形とちがうところである。ほかにも、テンス、ムードをもたず、独自の主語をとりうる、文中にあらわれる動詞の語形は、連用形にはいる可能性がある。

いまみたまとめ中止形に対応するうちけし中止形をあげておく。シテカラ形、スルマデ形などは、うちけし系列にそれにあたるかたちがない。一方、旧連用形からシテ形に相当しそうな箇所は、うちけし系列のほうが多様である。シテカラ形、スルマデ形のばあいのように、みとめ系列のほうがうちけし系列より語形がおおいことはありがちだが、その逆はふつうとはいえない。方言などにこういう現象があると、あるはずの語形をしらべらすことがおこる。

旧連用形	ヨマズ
セズニ形	ヨマズニ
シナイデ形	ヨマナイデ
シナクテ形	ヨマナクテ
シナク形	ヨマナク
ならべたて形	ヨマナカッタリ

ここでも、みとめのヨミにあたるヨマズの中止形としての使用は文章語(=標準語)的である。セズニ形も東京方言ではよくつかうとはいえない。なお、奄美諸方言ではヨマズにあたるかたちが、古代語とおなじく同音形式の終止形にもなっている。

シナイデ形、シナクテ形がみとめのシテ形に対応するのだろうが、シナク形はふつうの中止形としてはつかわない。ヨマナク ナル、ミエナク スルのようなナル、スルとのくみあわせにでてくるばあいをみている。タマラナク、オボツカナク、クダラナクなどがふつうの中止形のようにつかわれるとしたら、タマラナイ、オボツカナイ、クダラナイが動詞のうちけし系列からとびでて、形容詞化しているためとかんがえられる。

シナク形をもたない方言では、これをノマン ヨーニ ナルと迂言的にいたり、ヌマン ナリユンのように（奄美諸方言）いたりする。このヌマンは連体形と同音形式の連用形とみざるをえない。

・副動詞中止形

シイシイ形	ヨミヨミ
シナガラ形	ヨミナガラ
シツツ形	ヨミツツ
シガテラ形	ヨミガテラ
シイシナ形	(モドリシナ)
目的形	ヨミニ
意図形	ヨモート

副動詞は文中で主文の述語のしめすうごきと同時にすすむ、副次的なうごきをあらわす。つまり、もっぱら、いままでの中止形にみられた修飾語的な用法であらわれ、それにともなって、いままでのものちがって独自の主語をもつことがない。その点で、動詞の語形としてはもっとも副詞化しているので、あらためて副動詞のなづけをかりて、副動詞中止形とよぶが、中止形の下位グループとみておく。ほかにも、じまえの主語をとることのない中止形があったらここにくわわる。

シイシナ形はイキシナ、カエリシナ、キーシナのように、すくなくとも東京方言などでは、このかたちをとる動詞項目は、移動動詞およびネシナぐらいである。

目的形はイッパイ ノミニ マチエ デカケル、意図形は、ヤスミニデモ ヨモート ホンオ カイコムのようなかたちである。

また、この中止形のうちけし系列は、ヨマナイナガラのように一部でてくるかたちもあるが、この種の逆接的な用法は副動詞中止形的でない。ただし、意図形のうちけし、ボールニ アタルマイト カラダオ ヒネッテ ヨケルがいえるとしたら、これは副動詞中止形のようなものである。

○ 条件形

連用形の下位カテゴリーとした条件形は、中止形とちがって、コトガラの時間的な前後、同時関係だけをしめすというより、時間関係をもふくみこみながら、あるコトガラが、主文でしめされるコトガラがなりたつためにはたらく条件としてとりあげられていることを積極的にあらわすかたちである。動詞のさししめすコトガラと現実との関係が条件としてはたらくかどうかは、ことがらをふまえつつも、ハナシテの観点をとおしてきめられる。つまり、条件形は条件法といわれることがあるように、ムードによっていろぞめされたかたちどもからなる、連用形の下位体系である。つづいてとりあげる譲歩形も、この点で条件形と同様である。

連用形にはテンスとムードのカテゴリーがでてこないといったが、さきの中止形が時間表現と無縁ではなかったのと同様、条件形、譲歩形にはムード性がくいこんでいる。

(みとめ)

スレバ形	ヨメバ、ヨミヤー
シテハ形	ヨンデワ、ヨンジャー
スルト形	ヨムト
シタラ形	ヨンダラ
スルナラ形	ヨムナラ
シタナラ形	ヨンダナラ

(うちけし)

ナケレバ形	ヨマナケレバ、ヨマナケリヤ (一)
ナクテハ形	ヨマナクテワ、ヨマナクチャ (一)、ヨマナキヤ
ナイト形	ヨマナイト
ナカッタラ形	ヨマナカッタラ
ナイナラ形	ヨマナイナラ
ナカッタナラ形	ヨマナカッタナラ

条件形の意味・用法をみていくには、条件節がコトガラ的になにをあらわしているか、主文のあらわす帰結とどういう関係をあらわしているか、条件として機能しているかいないかなど、いろいろな面から検討していく必要がある。それらをどのような軸にそって整理していったらいいかまだまとまらないので、以下では順不同の例示にとどめる。かさなっているものがあるかもしれない。

- ・原因や状況・ばめんなどをさしだしているか、条件をさしだしているか。
- ・条件節でしめされるコトガラは一般的か、個別的か。
- ・仮定的な条件をさしだしているか、確定したことを条件としてさしだしているか。
- ・未来のことをさしだしているか 過去のことをさしだしているか。
- ・未来のことが条件としてさしだされているか、単なる予定か。過去のことは反現実・条件としてさしだされているか、そうでないか。
- ・条件節でしめされるコトガラは主文のコトガラにくらべてせまいか、ひろいか。
- ・主文の述語のかたちはムードの点でどうなっているか。
- ・条件形のかたちをかりた別の用法になっているか、いないか（あわせ述語の主要語の部分、ならべあわせ文の先行節）。

条件形のメンバーとして、スルナラ形、シタナラ形をタテにくわえておいたが、このふたつがかたちのうえでスルーシタのテンス対立をなしていることはうたがえない。それを理

由に条件形からはずして、あとででてくる接続形の下位にくわえることもできる。

もっとも、スルナラ—シタナラは非過去—過去というスルーシタ対立の中心をなすテンシ的な対立をしめさず、未完—完了（以前—以後でもいいか）という対立をしめす点では、スルノデ—シタノデなどとおなじにして接続形グループに入れるのはまずい（もちろんかたちのなりたちもノデ形とおなじではない）。

条件形のこの種の分裂は、古代日本語にもみられる。いわゆる仮定条件をしめすヨマバと確定条件のヨメバをくらべると、前者にはテンス対立がないのに、後者にはある。つまり、ヨマバは連用形的だがヨメバは接続形的である。

ヨマバ	(———)
ヨメバ	ヨミシカバ (ヨミケレバ)

条件形のつくりをみると、シテハ形のように、中止形にとりたての助辞がくっついたかたちがある。また、スレバ形のバは、とりたて助辞のハとおなじものだったともいわれている。シタラ形やスルナラ、シタナラ形もシタレバほかからかわってきたもので、バをとりこんでいる。中止形にくらべて条件形がモーダルな意味によっていろぞめされていることは、このハ、バなどがとりこまれていることと無関係ではないだろう。

なお、古代日本語の動詞のうちけし系列や形容詞に関して、それらの仮定条件をあらわすかたちが、～ズバ、～クバではなく、ヨマズハ、タカクハであって、連用形を出発点としていることは、しられている。連用形のハとりたてのかたちを出発点とする、条件的な意味の表現のしかたは、ここにもみることができる。

○ 譲歩形

譲歩形も、ふつうの中止形とちがって、モーダルな意味でいろぞめされている点、条件形と同様である。そこで、中止形に副動詞中止形をいれたように、ひろいマトマリとしての条件形をたてて、その下位に条件形と譲歩形をたてるいきかたもかんがえられる。

(みとめ)

シテモ形 ヨンデモ
シタッテ形 ヨンダッテ
シヨウト形 ヨモート
シヨウガ形 ヨモーガ

(うちけし)

ナクテモ形 ヨマナクテモ、ヨマナクッテモ
ナクタッテ形 ヨマナクタッテ、ヨマナクッタッテ

譲歩形の意味・用法のとらえかたは、条件形のばあいと同様である。ただし、譲歩とは、条件をふまえた概念なので、さらにつきのような点がかわわる。

ある条件のもとであるデキゴトがあらわれるときには、条件形でその条件がしめされる。その出発点的な条件は承知しながらも、一步ゆずって、そこからはみだした条件のもとでも、帰結となるデキゴトがなりたつとき、この種のはみだした条件は、出発点の条件をしめす条件形に対して、譲歩形でさしだされる。

・アメガ ヤメバ デカケマス。(出発点の条件をしめす条件形)

アメガ ヤマナクテモ デカケマス。(はみだしたわるい条件をしめす譲歩形)

・カネガ ナケレバ クロースル。(条件形)

カネガ アツテモ クロースル。(はみだしたわるくない条件をしめす譲歩形)

一方、つぎのような譲歩文は、出発点となる条件をふくんだ条件文との関係が、うえにみた譲歩文のばあいとちがっている。

・アメガ ヤメバ デカケマス。

アメガ ヤンデモ デカケマセン。

・カネガ ナケレバ クロースル。

カネガ ナクテモ クローシナイ。

これらの譲歩文は、譲歩節でしめされるデキゴト＝条件が実現しても、主文のうけおうデキゴトは実現しないことをさしだしている。つまり、ついとなる条件文とおなじ帰結をみちびきだすための条件としては、この譲歩形ははたらいていなくて、それと対立的な帰結をひきだしている。譲歩形のほうも、譲歩的な意味にくわえて、対立的な条件(逆条件)をあらわしているといつていいか。

連用形としてひとくくりにした、中止形、条件形、譲歩形のつくりのうえでの関係を見ると、譲歩形ヨンデモは中止形をモでとりたてたかたちから出発している。条件形のなかのヨンデワも同様である。ヨメバ条件形などにみられるバも、さきへのべたが、おこりは助辞ハと関係があるといわれている。また、ヨンダラ、ヨムナラ、ヨンダナラにはバがないが、ヨミタレバ、ヨムナレバ、ヨンダナレバからこうなったとされる。これらを見ると、中止形はとりたてに無関心な連用形であるのに対して、条件形、譲歩形は、とりたてに縁のふかい連用形のようなものである。両形に陳述的(モーダル)ないろあいがみられるのは当然かもしれない。

奄美の諸方言では、この条件形がさらに-ハにあたる助辞によってとりたてをうけることがある。ユミバー(喜界島)、ユミボー(与論島)のように。喜界島のユミバーはユミバに対して、とりたて=強調的な意味をそえている。その点、標準語ヨメバコソのようなかたちとくらべることができる。一方、与論のユミボーは外形=表現面でのとりたてが内容面でのとりたてをともなっていないで、とりたてなしのユミバのほとんどあとがまにおさまっているのかのようである(バ形はしまびとはきいて違和感を感じないようだが、じっさいにはなしにでるのはボー形である)。ここではヨメバ、ヨメバハの二代にわたってとりたての形式化がおこったことになる。また、奄美の諸方言にはユマバン、ユミュラバンのような譲歩形がある。これはバ条件形にモをそえたかたちだが、ここからは、条件

形の後発として、譲歩形がでてきたことがうかがわれる。おなじ連用形としたが、成立の新旧には、中止形、条件形、譲歩形でちがいがりそうである。なお、与論島方言ではこのような事情から、条件形と譲歩形のあいだには、あたらしい対等関係ができあがったとみられる。つまり、土台となるかたちに -ハをつけて条件形、-モをつけて譲歩形にするという同一のてつづきだ。

ユミバ（非自立形式 bound form 化）+ハ ユミポー（条件形）
+モ ユミバン（譲歩形）

方言のうちけし譲歩形として、ヨマナクモのようなテぬきのかたちがきかれることがある（埼玉県秩父方言など）。おなじく、ヨマツト、カカツトなども、秩父方言などにあらわれるが、これはヨマズト、カカズトが転じたもので、イワズト シレタ～のような～ズトモ、～ズトテの意味の譲歩形である。東日本方言のうちけし系列にズ形を出発点とするかたちがみられることの例でもある。また、一段タイプからのこの譲歩形がオキラットあるいはオキヤットのようラ行四段タイプ化したかたちになることは、別にのべた。なお、ヨンダツテ譲歩形がヨンダトテからきた可能性はあるが、うちけしはヨマナクツテで、ヨマナカツトテと関連をつけやすいヨマナカツタツテではない。ただ、トテ形が中央語的でズ、ヌのうちけし形になじみやすいとしたら、そちらの線のかたちがありえたかもしれない。さきのヨマツトのような譲歩形も、そういう傾向のあらわれだったわけである。

□ 接続形

連用形とおなじく、主文に先行する節の述語になるかたちがある。それらは～ケド（ケレド、ケレドモ）、～ガ、～カラ、～シなどのかたちをとる。連用形とちがって、これらは、テンス、ムードのカテゴリーをもつ。ケレドモ接続形みとめはつぎのようになる。ケレドモのところはケド、ケンド、ケドモほかいろいろありうる。文章語での代表形をケレドモとすれば、ケドは共通はなしことばのかたちだが、ケレドモ自体もガにくらべるとはなしことば的である。このように同一方言でも通時的には $a \rightarrow a' \rightarrow a''$ とタテならべになるいくつかのかたちを、共時的な平面上でもちに行っていることがある。

テンス ムード	非過去	過去
断定	ヨムケド	ヨンダケド
推量	ヨムダローケド	ヨンダダローケド

以下語形対立のみしめす。

ヨムガ	ヨンダガ
ヨムダローガ	ヨンダダローガ

ヨムシ	ヨンダシ
ヨムダローシ	ヨンダダローシ

ヨムカラ	ヨンダカラ
ヨムダローカラ	ヨンダダローカラ

うちけし

ヨマナイケド	ヨマナカッタケド
ヨマナイダローケド	ヨマナカッタダローケド

ヨマナイカラ	ヨマナカッタカラ
ヨマナイダローカラ	ヨマナカッタダローカラ

ヨマナイガ	ヨマナカッタガ
ヨマナイダローガ	ヨマナカッタダローガ

ヨマナイシ	ヨマナカッタシ
ヨマナイダローシ	ヨマナカッタダローシ

接続形は命令、さそいかけのかたちなどをもたないが、テンス、ムードのカテゴリーをそなえる点で、連用形、連体形にくらべると、終止形の語形対立にちかい。三上章は接続形を「係りの終止法」とする。だとすると、ケド、カラなどの助辞は終止形に接していることになるだろう。あわせ文の主文でない部分に終止形がでてくるあわせ文は、連体形、連用形からなるあわせ文に対しては、アルタイ的でないといえそうである。…ヨムケレドと…ヨム、ケレド…はかたちのうえでもちかい。いま、終止形とは別の接続形としておくが、連体形、連用形を分詞形、終止形を本詞形と宮田幸一のようによぶなら、接続形はつきそい本詞形とでもいうことになる。

このような接続形のつくりの事情からみて、その成立も連体形、連用形よりあたらしいとかがえられる。シ接続形は琉球方言ではでてこないことのほうがおおい。かわりにユミユリのようなかたち(ヨミヲリに由来)にヨムシのはたらきをうけおわせるいきかたも、首里方言などにみられるが、これにあたるユヌイ(ユミユイ)は、ヨンダリにあたるユダイトひとくみになる、連用ならべたて形だろう。首里方言ではり形が終止的な用法であられることはない。

また、山梨方言などでは、おなじくヨムシにあたるかたちが、あることはあるが、テンス対立はしめしても、ムードのワクをもたないようである。つまり、ここのシ形はあとでとりあげる準接続形だといえる。

もっとも、接続形にあたるかたちが、方言のかたちか標準語からとどけられたかたちかをたしかめるにあたっては、うえにみたような特殊性は、そのかたちを方言のがわにあるものとみなすためのよりどころになる。接続形接辞のまえの動詞の語形にあたる部分が、方言独自のかたちであるなら、接辞部分が標準語とかわらなくても、全体は方言の語形と

みていだらう。

ガ接続形はケレドモ接続形にくらべて、あらたまった感じである。また、マツモトデスガはマツモトデスケドとともにいえるが、オレダケドをオレダガとはいいいにくい、ということが東京方言ではあるかもしれない。またある地域のガ形に、たとえば秩父方言のように、ヨンダツケガのようなかたちもみられるとしたら、標準語からの移入かどうかは別として、ガ接続形も東部方言に座をしめている。

○準接続形

接続形とちがって、テンスのカテゴリーをもつがムードの対立をしめさない語形がある。

ヨムノニ	ヨンダノニ
ヨムノデ (ヨムンデ)	ヨンダノデ (ヨンダンデ)
うちけし	
ヨマナイノニ	ヨマナカッタノニ
ヨマナイノデ (ヨマナインデ)	ヨマナカッタノデ (ヨマナカッタンデ)

これらノニ形、ノデ形は、接続形の活用が終止形にちかいのに対して、連体形的なワクにおさまっている。つくりの点でもヨムノニほかのノ形は準体形からでている。

ヨムダローニ、ヨンダ(ダ)ローニのようなかたちがいえるとしたら、旧準体形からのつくりの推量系列が、うめあわせ的にあらわれた結果、ケレドモ形以下の接続形に入れることができる。

接続形、準接続形にあげたかたちは、意味的に、従来から逆接(ケレド形、ガ形、ノニ形)、順接(カラ形、ノデ形)のようにわけられてきている。シ形は共存接続形のように命名される。逆接接続形のほうが順接接続形よりおおいという傾向が諸方言にみとめられるかもしれない。また、さきにのべたが、共存接続形はでてこない方言がある。

カラとノデは、またケレド・ガとノニはどうちがうかは、接続形や準接続形のワクのなかで比較できる。しかし、スルノニとシテモ―シタツテの異同になると、カテゴリーをこえたつきあわせになる。形態論的な語形の対立をこえたあつかいとみえても、実際の言語使用のなかでこのような対立―選択があるなら、それを無視することはできない。形態論的な再帰態のかたちがなくても、再帰構文は問題になる。希求法と希求文の関係も同様である。スルノニとシテモの対立は、構文論ではとりあげる必要がある。

さきに、古代語における出発点がおなじだった連体形と終止形を、現代語で区別する基準として、ムード、テンスなどの文法的なカテゴリーのそろいかたのちがいをあげた。このちがいは、連体形、終止形以外のかたちにもおよんでいるため、連用形や接続形にも適用をひろげ、接続形の下位で準接続形もとりだすことにした。

もちろん、ノムナラーノンダナラのような、すくなくともみかけ上のテンス対立をしめすかたちが、準体形由来の準接続形とおなじになるといった問題が生じる。この種の問題は、さきにもみたように古代語にもでてくる。

ヨマバーテンス・ムード対立なし

ヨメバ、ヨミシカバーテンス対立あり

ヨメド (モ)、ヨミシカド (モ)、ヨマメド (モ)、ヨミケメド (モ) —テンス・ムード対立あり

古代語ではふつうの終止形終止のほかには連体終止、さらに已然終止もあることは知られている。その点ではヨメバ、ヨメド (モ) は終止用法ともかかわっているといえる。連体—準体形との差は、現代語の条件形と接続形のばあいほどおおきくないようである。

□おわりに

本稿は別稿「文法記述のために—動詞のばあい—」とともに、筆者のねがいとしては、すくなくともきいてわかる程度に母語＝方言を所有している学生が、本人の方言を記述してみようというときの参考になればと、日本語文法のうち動詞の活用現象についてかきつらねたものである。そのため、本文のなかで直接方言についてふれたり、例文をあげたりしているが、基本的には標準文章語でなく、共通はなしことばをみわたすかたちで、はなしをすすめている。本文中の語形や例文が、カナ表記だが表音的になっているのも、方言のあつかいと関連からである。

もっとも、方言文法の記述にひごろなやまされているのは、まず第一に本稿の筆者なので、かいているうちに自身のためのこころおぼえのようになってしまっているところがある。

動詞の活用体系に関しては、本稿では機能、意味のカテゴリーにそってとりあげているが、待遇形式、態、アスペクト、やりもらいなど、日本語動詞で、文法的な動詞系列としてあらわれる（つまり、各自の活用体系をもつ）カテゴリーについてはふれることができなかった。

また、標準文章語にないカテゴリーについても、奄美大島方言のうたがい法—たずね法、さらにたずね法の全体たずね—部分たずねなどの対立を紹介したが、語形のあることはわかっているが、その中心的な意味がつかめなくて、カテゴリーへの一般化がみいだせないものがある。奄美大島北部方言の終止形ユミユリにはハナシテがイマ、ココで外界のデキゴトを目撃してとらえていることをさししめす用法がある（筆者のいう「メノマエ性」）。その意味がユミユリ形の中心的な意味だとすれば、非メノマエ形ユミユン—メノマエ形ユミユリという対立がなりたつ。さらに、ユミユン、ユミユリ両形をふくむ断定法のなかで、非メノマエ形—メノマエ形が対立することになるが、この対立を統一する文法的なカテゴリーを、筆者はまだとりだしていない。エヴィデンシャリティー evidentiality のような用語の採用の問題とともに、今後の課題である。

[本稿をまとめるために参照したおもな文献]

教科研国語部会東京言語研究サークル1963『文法教育』むぎ書房

鈴木重幸1972『日本語文法・形態論』むぎ書房

高橋太郎ほか2004『日本語の文法』ひつじ書房

松本泰丈2014「文法記述のために一動詞のばあい」(『別府大学紀要』55)